

母の713 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



わたしの原風景⑨／福田岩緒 2

作者が語る「14ひきのシリーズ」④／いわむらかずお 3

子どもの豊かな育ちを願って ほんごう子ども図書館のあゆみ／重田正行 4

作家と画家がであうとき⑩／日向理恵子 6

「どうぶつしかけえほん」シリーズ完結！／仲本美央 7

イラスト／高島那生

たっちゃんとうきちゃん

得田之久

1960年代、神奈川県の大磯の海岸に近い住宅地に、大学生のうきちゃんと小学生のたっちゃんが隣り合わせに住んでいました。昆虫少年真っ盛りのたっちゃんと、いつまでもグズグズと昆虫少年を引きずっていたうきちゃんは、よく連れ立って虫取りに出かけて行きました。近くの林で捕まえるクワガタやカブトムシに飽き足らなくなると、2人はたっちゃんのお母さんの実家がある山梨まで、珍しいオオムラサキやミヤマクワガタを求めて出かけていったこともありました。

やがて、たっちゃんは高校生になると突然、知的好奇心が芽生え、通っていた県内有数の進学校の図書室の本を全て読み切ったなどと噂されるようになりました。一方平凡な大人になりたくなかったうきちゃんは、大学生のある日、突然絵を描き始め、それがすぐに出版社に認められると昆虫をテーマにした絵本作家になり、忙しく日本中の昆虫を探して飛回る日々を過ごすようになりました。

たっちゃんの知的好奇心は著しく、有名な学者や作家や評論家と出会い、海外を飛び回り、やがて自分でも次々と本を出版するようになりました。たっちゃんの本は専門家やマスコミの間で高い評価を受け、海外の大学へ講義に出かけたり、ノーベル賞作家のル・クレジオが大磯の自宅まで会いにくるような存在になっていきました。

その頃、うきちゃんが創っていた昆虫を主人公にした絵本は、当時世界で大変珍しい絵本と評価されました。そして孫の誕生と同時に虫以外の絵本も創るようになっていきました。

2人の住居は時に離ればなれになりましたが、その後再び大磯の地に戻り、友情は今でも続いています。いつの間にか虫好きになっていた、たっちゃんの息子^{れい}の嶺くんと3人で虫を探しに行く事もあります。

そのたっちゃん——文化人類学者の今福龍太くん（「たつた」を「りゅうた」に改名）が、一昨年ちくま書房より『ぼくの昆虫学の先生たちへ』を出版しました。ファールブル、ダーウィン、ヘルマン・ヘッセ、安部公房など彼を未知なる生命の世界へと誘ってくれた14人の先生への思いが手紙形式でまとめられた本です。その中に、なんとうきちゃんこと私も入っていました。私の恥ずかしがるさま喜ぶさまは、周りの人が見ても微笑ましいものだったそうです。

（とくだ うきひさ／絵本作家）



わたしの原風景

39

福田岩緒

ふくだいわお／絵本作家

昔のわが家は平屋建てだった。六畳二間に三畳の部屋があり、台所は土間になっていて、土間からぐるりと回れば南に面した庭に出られた。道路がある家の東側に建物に張り付くように三畳ほどの納屋があった。僕が小学四年生の頃、どういつ誤で僕専用の納屋になったのか忘れてしまったが、その納屋を僕は「ひみつの基地」に改造した。庭からの入口はすだれを吊って扉にし、地面は厚めに撒いたワラの上にムシロを敷き詰めた。母屋の壁側には二段に積んだ木箱を並べて棚も作った。その棚にマンガやビー玉やオモチャなど、僕の大切なものを飾るようにして並べた。学校から帰るとランドセルを背負ったまま「ひみつの基地」へ直行するのが当たり前になっていた。雨の日は「ひみつの基地」で、お菓子を食べながら、宿題をしたりマンガを読んだり絵を描いたりして、心地の良い空間で贅沢な時間を過ごした。「ひみつの基地」にはもう一つの楽しみがあった。道路側の板塀にはいくつもの節穴があって、退屈すると節穴から見える世界で遊んだ。通り過ぎる友達にいきなり声をかけて驚かせたり、道路向こうの塀の上のネコを観察したりした。

その節穴の世界で今でも強烈に残っている思い出がある。それは家庭訪問の時のことだ。家庭訪問の日、学校から帰った僕は、「ひみつの基地」で先生が来るのを待っていた。足音が聞こえてドキドキしている僕の節穴の世界に、自転車をひいた先生が現れた。静かに現れた先生の美しい横顔は、なぜか疲れたようにうつむいていた。その瞬間僕は先生の横顔から目をそむけた。僕の中の先生は、いつも笑っている明るい先生だった。生徒と一緒にふざけて、生徒と一緒にしゃべらない寂しそうな顔をしていた。

家庭訪問で母親と話していた先生は、いつもと変わらない明るい先生に戻っていた。今でも「ひみつの基地」を思い出すたびに、節穴の世界で見た先生を思い出してししまう。

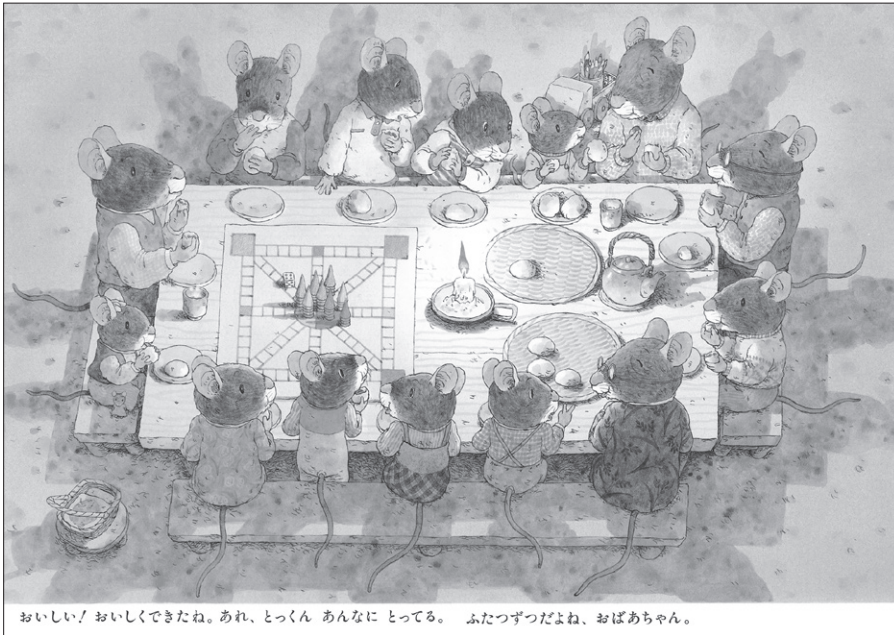


14ひきのさむいふゆ

いわむらかずお／さく
1985年11月刊行

森は雪にうもれています。
あたたかなへやで、みんな
はなにかをつくっています。

作者が語る 「14ひきのシリーズ」4 いわむらかずお



おいしい！おいしくできたね。あれ、とっくん あんなにとってる。 ふたつずつだね、おばあちゃん。

シリーズ四作目の『14ひきのさむいふゆ』は一九八五年に刊行されました。シリーズのスタートから二年半で四作目です。描きたくてたまらなかったのですね。『さむいふゆ』も、はじめの頃から考えていたテーマです。雪にとざされた冬のあいだに、14ひきたちがどう過ごしているのかを描きたいなと思っていました。

絵本を作る際、全体の構成を考え小さな試作本（タミー）を作り

「14ひきのさむいふゆ」

ます。そこから各場面を練り上げていって、下絵を描いていきます。制作中にいいねにその季節の取材を行います。『さむいふゆ』の冬景色の取材は、当然冬のあいだにしましたが、いよいよ本絵にかかる時には、季節は「あついなつ」となっていました。当時はアトリエにクーラーがなく、汗をかきながら絵を描いていましたが、透明水彩ですから、絵の上に汗を垂らしてしまったら大変。雪景色などはこまかしようがありません。水を入れたバケツに足を入れて、『さむいふゆ』と言いながら、描いていました。

『さむいふゆ』にも、自分自身の体験が背景となっていることがあります。例えば、みんなで「とんがりぼうしゲーム」をして遊んでいる場面。私が子どもの頃、兄がどこからか仕入れてきたゲームなんです。きょうだいで手分けしてゲーム盤やとんがりぼうしを作って遊んだんです。現代の暮らしの中では、そうしたことがなくなっているようにも思いますが、自分で作るということはとても大切なことですね。

おやつにお饅頭が出てきますが、小学生のころ私はお饅頭を作るのが得意だったのです。小麦粉に重曹を入れ膨らまして、よく作りました。14ひきたちのお饅頭には餡子あんこが入っていますね。私の子どもの頃はぜいたくなものでしたから、小豆あずきの餡子を入れるなんてことはめったになかったのですが。

『さむいふゆ』は、最初の場面が外の吹雪の情景から始まります。二見開き目からは、オレンジの暖かい色を使って室内をずっと描いていきます。後半に窓から光が差し込んで、また真っ白の画面に転換し、14ひきたちは外の世界に飛び出していきます。場面の連なりからなる絵本ならではの展開の仕方が、ここにあると思います。

古里の子どもたちへの思い

子どもたちの笑顔と、無邪気な笑い声であふれる「ほんごう子ども図書館」。
国産杉の丸太で作られたログハウスの室内は、無垢の板が敷き詰められ、子どもたちがのんびりと寝ころんでいます。この図書館は、三原市本郷町出身の教育学者・大田堯先生の「古里に子どもたちのための図書館を作りたい」という思いを吉田達也氏（ほんごう子ども図書館初代館長）に相談されたことがきっかけで、二〇〇一年七月に開館しました。

当時図書館のなかった本郷町（合併して現在は三原市）に、子どものための図書館を作ろうという思いは、地域の人々の心を動かし、有権者の四分の一に相当する二千三百人分の署名も集まりました。吉田氏を代表とする「新しい子ども図書館設立の会」も結成され、オープンまでの一年間に百回を超える話し合いを重ねました。大田先生が私有地を本郷町に寄付、建設費や備品の購入は本郷町が負担。運営は地域ボランティアで行い、建物の維持管理は行政が担当する、「公設民営」の子ども館「ほんごう子ども図書館」が作られたのです。

開館当初は、絵本を購入する予算もなく、大田先生から寄付された蔵書千百冊でのスタートを予定していました。しか

子ども 豊かな育ちを 願って

——ほんごう子ども図書館のあゆみ



ほんごう子ども図書館

広島県三原市本郷南6-21-37（JR山陽本線本郷駅前）
Tel:0848-86-6066

公式Instagram

https://www.instagram.com/hongo.kodomo_lib/



し、あらゆる方面へ呼びかけたり、出版社へ手書きで手紙を送ったりしたことで、絵本の寄贈が相次ぎ、蔵書は三千冊にもふくらんでの喜ばしいスタートとなりました。

子ども広場との両輪で

大田先生が子ども図書館とともに、古里に作りたいかったのが、子どものための広場でした。子ども図書館と子ども広場はまさに車の両輪。子どもの豊かな育ちには本という想像の世界だけでなく、自然の中での実体験が大切です。図書館が開館してから一年後の二〇〇二年、地域の方々の協力により子ども広場「なんじゃもんじゃ」も開設されました。ターザンロープや釣瓶井戸、ピオトープなど、子どもたちが自然と親しむ環境づくりを行ってきました。現在は、広場に作った畑で、じゃがいも、玉ねぎ、さつまいもなど季節の野菜を植えて収穫し、カレーや焼きいもを作ってみんなで食べる収穫祭や大人と子どもと一緒に本気であそぶ、忍者修行などいろいろな行事を開催しています。

地域でつながり育ちの場を作る

公設民営で運営するためには、地域の方々との連携が欠かせません。「図書館

だより」や会報「かめ太」の配布、さまざまな行事の開催を通して、図書館活動を地域の皆さまに理解していただき、行政との連携を密にしつつ、子どもたちの自主性が育ち、人のつながりの拠点になる図書館を目指して活動しています。

初代館長・吉田氏は地域全体の連携をはかる「子どもの森構想」を提唱し、同じエリアの子ども図書館・保育所・幼稚園・小中学校・高校等が連携し、おはなし会などの行事を一緒に開催するなど、相互に交流する活動を行っています。

数年前から、子ども広場を利用し、地域の小学校と連携して椎茸栽培にも取り組んでいます。四年生の時にドリルを使ってほだ木に穴を開け、シイタケ菌の駒うちをします。卒業の年に収穫をしますが、収穫までには重たい木をひっくり返したり、木をトンカチで叩いたり。色々な作業が必要です。子どもたちが「本郷魂椎茸」と命名してくれて、今春は五百本以上の椎茸を収穫しました。

子どもを真ん中に

「ここでは「静かに」というルールはありません。本を読みたい子、友だちと遊びたい子、寝ころがりたい子、本をひっぱり出してみたい子。他の人の迷惑にならないければ自由に過ごしていいのです。

ほんこう子ども図書館 館長
重田正行
(しげた・まさゆき)

広島県尾道市の中学校教諭として37年間勤務。退職後、「ほんこう子ども図書館」の運営委員として活動。のちに館長に就任。

広島県のほぼ中央、JR本郷駅の真向かいに

国産杉の丸太で作られた小さな建物があります。

地元出身の教育学者、故・大田堯おおた たかしさんが

私有地を寄付して作られた「ほんこう子ども図書館」です。

子どもの育ちの場であり、地域の人の

つながりの拠点でもある図書館のあゆみについて、

館長の重田正行さんにお話ししていただきました。

子どもたちの自主性を尊重し、自ら創造する喜びを得て欲しいと、開館当初から「手作り絵本講座」を開催しています。

子どもたちがお話を作り、絵を描き、製本まで自分で行います。図書館の絵本を通じて吸収した栄養が手作り絵本として実を結ぶのです。毎年たくさんの絵本が生まれ、完成した絵本は「手作り絵本のおはなし会」で作者自ら読みかたります。

ほんこう子ども図書館では、「読み聞かせ」でなく「読みかたり」という言葉

を大切にしています。



た。「かたり」には「関わり合う」という意味があります。一方的な「読み聞かせ」ではなく本を通して、子どもとかわり合い、お互いの絆を深めたいと考えています。

コロナ禍の中では、「子ども秋まつり」を開催しました。「楽しいことをしたい」という子どもたちの切実な声からはじまり、大人は裏方に徹して、子どもスタッフが企画・準備・当日の仕切りまで全てを手がけました。子どもたちの一生懸命な姿や、やり遂げた姿をとっても頼もしく感じています。

生命を響かせ合える場所として

大田先生が亡くなる一カ月前、開館当初からの女性スタッフ七名が埼玉の大田先生宅を訪ねました。先生はたいそう喜ばれ、二つの話をされたそうです。「みんなで仲良く話し合って運営していくって欲しい」「子どもたちが絵本を読んだ後、実物に触れたいような選書をして欲しい」。その、熱い想いを私たちはしっかりと受け継ぎ、次の世代へ伝えていきたいと願っています。

これからも、子どもを真ん中に、みんなで関わり合いながら、新しい生き方を拓く拠点になる場所として活動を続けてまいります。

狸から 吉田尚令さんへ

日向理恵子

「町を一步出たなら方言を隠せ。舐めてかかれるぞ」。中学卒業前の恩師のことは半信半疑ながら心に残っていて、仕事をするときはピシッとしなくては、東京へ行ったならかんぺきに標準語を使いこなさねば、と気負いながら、「関西の方ですか？」と一撃で素性が知れるありさま、しっぽが出たままの狸状態で、どうにかこうにか仕事をつづけてきました。

はじめて吉田尚令さんの絵を見たときに、なんと柔らかい、優しい絵だろうという印象を受け、幸運にもデビュー作である『雨ふる本屋』の挿絵を手掛けていただくことになり、いざはじまるやもつびしと設定や細部への「質問が来て、「吉田さんはこわい人かもしれない」と、びくびくしながら本を完成させた新人のころ。

作家と画家が であうとき 11 「雨ふる本屋」シリーズ

日向理恵子・作／吉田尚令・絵
2008年～2020年刊行



できあがった本は、しとしと雨にぬれた苔の手ざわり、「白黒の挿絵はガラス細工っぽくしてください」という抽象的な注文をこちらの想像を上回って受け止めてくださった、繊細かつおおらかな挿絵がたっぷいの、『雨ふる本屋』。

吉田さんの絵を前にすると、ことばが斜めになっていきます。ピシッと、まっすべ、正しいことばしか使わず、と自分に嵌めようとしている柳が、ぼろぼろこぼれていく感じ、耕されたばかりの土にふれているときと、心が同じ状態になってしまうのです。地面近くに咲く花や草の陰影をもっとよく見たくて、絵のそばへ、そばへ、ことばも体もかしいでいって、狸のしっぽは出っぱなしです。

このシリーズは優しい物語だとよく言っていたんだけど、主人公が分子にまで分解されたり、どろどろに溶けたり食べられたり、書けなくなったり自我が失われたり、世界が減びかけたりと、ほかの自分の作品よりも過酷だと、自分では思っています。どんな変てこな獲物（描写）を差し出しても、吉田さんが骨をパキッと踏み砕いて美しい絵にしてください、それが楽しみで、狸はせつせと山奥で狩りをしております。好き放題に獲物を追いながらも、吉田さんの絵に、もっともつと耳をすませたいと思っています。

もしもいつか、吉田さんの絵からはじまる本が書けたらいいな。そんなふうに夢見ています。

（ひなたりえ／児童文学作家）



『ふしぎな! どうぶつパーク』

いしかわこうじ / 作・絵
定価1,100円 (本体1,000円+税10%)

「どうぶつしかけえほん」シリーズ完結!



「どうぶつしかけえほん」シリーズ

いしかわこうじ / 作・絵
定価1,045円 (本体950円+税10%)

絵本からワクワク、 ドキドキの魔法にかかる

仲本美央

保育園へ訪問したある日のこと。一歳児の女の子が『かわいい! どうぶつパーク』を保育者と一緒に読みあっていました。すると、一ページずつのしかけを丁寧にゆっくりと開いて読む度に会話をしながら笑顔が溢れていきます。ねこのページに差し掛かると、女の子はハッと気づいたように、目線を保育室の棚の方へ向けました。そこには、ちいさなねこのぬいぐるみが飾ってあったのです。その姿に気づいた保育者はさっとそのぬいぐるみを取ってきて、絵本に描かれていたねこ同士がほっぺを合わせてすりすりとする挨拶と同じように、女の子のほっぺにすりすりしました。嬉しくてキャッ、キャッと大喜び。そこには、絵本の世界を体感する時間が流れていました。

「どうぶつしかけえほん」シリーズは、『かわいい』『すごい』『のんびり』などバラエティに富んだテーマで作られています。あかちゃんでもわかりやすいように、ダイレクトに目に飛び込む絵が描かれ、想像をしやすい平易な言葉で動物それぞれの特徴を味わうことのできる絵本です。私は、乳児期からの人と共に『絵本の世界を味わう』ことの積み重ねが、現実の世界でも知ってみたい、やってみたいという子どもの意欲を生み出し、それがいずれ実体験とつながった時に人として生きる上での大切な力となっていくのだろうと考えて

います。

実は、ある講演会をきっかけにプライベートでも交流のあるいしかわこうじさんは、日頃からこの実体験をこよなく愛する絵本作家です。人・物・出来事と触れ合いながら、常にワクワク、ドキドキを味わって絵本の制作をしています。きっと、そんないしかわさんから生み出された絵本だからこそ、子どももワクワク、ドキドキしながらさまざまな意欲が掻き立てられるのでしょう。私は、そんな子どもの姿を見つけるたびに、絵本というものには作家の心持ちが伝染する魔法があるのだと感じます。今度の新刊は『ふしぎ』。お子様と一緒に父様や母様も動物の『ふしぎ』を発見する魔法にかかってみてはいかがでしょうか。

(なかもとみお / 白梅学園大学・大学院教授)

「どうぶつシール」つきの
セットボックスが
できました!



「どうぶつしかけえほん」(全4巻)

定価4,235円 (本体3,850円+税10%)

10月の新刊図書！

あかちゃん ととととと ごろん ごろごろ

三浦太郎／さく・え

定価880円（本体800円＋税10%）



「ふぁ〜」いちごのあかちゃんや、バナナの父さんが大あくび。みんな好きなところで“ごろんごろごろ”して、気持ちよさそう……。

絵本・ちいさななかまたち おみせやさん

かどのえいこ／ぶん
たばたせいいち／え

定価1650円（本体1500円＋税10%）

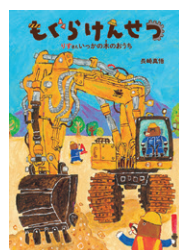


「いらっしゃい。いい もの うりますよ。」あめのひに、ぼくがおみせやさんをしていると……。1992年初版の本作にあとがきを加えた改訂新版。

読者の声

絵本・こどものひろば
もぐらけんせつ
りすさんいっかの木のおうち

長崎真悟／さく
定価1430円（本体1300円＋税10%）



本屋さんで見つけて、すぐに気に入って買いました。動物と建設重機が大好きな三歳の男の子にぴったりの絵本でした。

（広島県 T・O 四〇歳）

単行本絵本
おきにいのり
しろいドレスをきて
レストランにいきました

渡辺朋／作
高島那生／絵
定価1650円（本体1500円＋税10%）



この絵本の世界に「がががーん」でした。こんな絵本ははじめてです。ナンセンスだけれど、ひきこまれるおもしろさでした。

（岡山県 Y・T 六三歳）

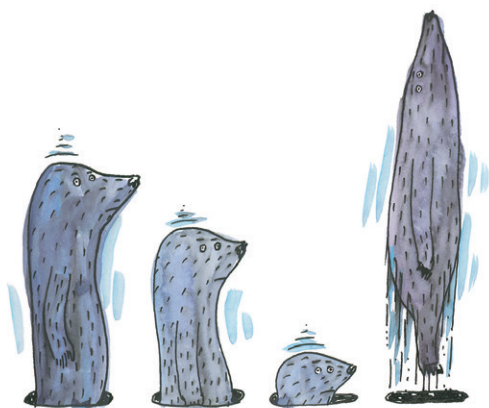
単行本図書
がっこうかっぱの生まれた日

山本悦子／作
市居みか／絵
定価1320円（本体1200円＋税10%）



戦争のある現実を子どもにどのように伝えるか迷っている時に、この本を手にとりました。カッパや学校生活などの話に始まり、あっという間にちよが変化していくようすには、ショックもあったようですが、子どもなりにメッセージを受けとってくれていました。

（埼玉県 H・G 三九歳）



イラスト／高島那生

あとがき

●紙芝居の脚本は「やさしい日本語」でできていますから、日本語を習い始めた外国人には、紙芝居は日本語を聴く練習になり、日本語学習の経験を積んでいけば、紙芝居は日本語を読む＋話す練習にもなる日本語学習教材として応用できるものですが、紙芝居は外国人だけでなく、じつは日本の子どもたちにも同様に作用していると思いませんか？ **H**

●同世代の絵本作家や書店員、編集者らと絵本の読書会を定期的に行っています。1冊の絵本をじっくり読み込む機会ができ、大変充実した時間となっています。新しいものが次々と生まれては、目まぐるしい速さで変化していく日々の中で、絵本を読むことは、そこから外れて立ち止まる時間を与えてもらえる、尊いことだと感じています。 **N**

2023年10月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第713号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：橋口英二郎
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。

購読料金は1年分600円（送料とも）。

